

---

# とある世界の交差点

つかちー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある世界の交差点

### 【Nコード】

N9950U

### 【作者名】

つかちー

### 【あらすじ】

俺の十六歳の誕生日に世界が交差した。少なくとも俺はそう解釈している。

今までこの超能力のある世界で生きてきた俺と、超能力の無い世界で生きてきた俺の二つの記憶が今の俺の中にある。

その影響か思い出の記憶がかなり曖昧になっているようだ。

二人分の記憶が重なっているのだから仕方がないのかもしれない。

まあ、そんなことがあったわけだが俺は俺のまま今まで通り生き

ていきたい。

上条とか土御門とかと一緒に馬鹿やっていたんだ。

……あれ？　何かデジャブ？　そんなことが絶対無理な気がした

……。

## プロローグ―世界が交差した―（前書き）

無謀な挑戦その二。  
以下略。

## プロローグ―世界が交差した―

不思議な気分だ。

まるで自分の中に二人の人間がいるような……。

いや、その表現も正しくはない。中にいるのは紛れもなく自分自身だ。二人いたとしてもどちらも自分だ。それに間違いはない。

昨日、十六歳の誕生日を迎えたと言うのに、ろくなイベントは起きやしない。

目が覚めた時、病室のやたらと白い天井を見上げた。

もともと、夏休みに入った直後の誕生日で祝ってくれる人はほとんどいないのだが。

面白い顔の医師が言うには倒れた原因ははっきりしないが、その影響で記憶が混乱しているとのこと。しかし、命に別状は皆無だと断言してくれた。

だが、俺の直観が告げている。ただの記憶の混乱ではないと。一人の俺は自分が今までもこの学園都市で生活してきたと言っている。

もう一人の自分は超能力なんて存在しないと、そういう世界で生きてきたと言っている。

知識も二人分。でも具体的なエピソード記憶は出てこない。

どちらが正しいかではなく。どちらも正しい事を俺は知っているのだ。

つまり、この超能力のある世界の学園都市で生きてきた自分と。

超能力を持たず、平凡な世界で生きてきた自分が混ざっている。

だから記憶が混乱しているようなのだ。

さっきのカエル顔の医師も知らないようで知っている気がする。

それに携帯に届いていたメール。差出人の名は上条――

彼は友人のはずだ。ただ、それだけではないような気がする。

何だっただろうか……？

幸いすぐに退院しても良いとのこと、補習をサボって補習の補習と言う間抜けな事態は避けられそうだ。

記憶に関しては後々考えるしかないだろう。

超能力を知る俺は面倒臭さを感じ、超能力を知らない俺は期待に胸を膨らませた。

## プロローグ―世界が交差した―（後書き）

禁書世界ではない方の主人公はごく一般的な少年でした（ライトオタク）

禁書目録も読んでいましたが、大部分は記憶の混乱の中です。

それがデジャブという形で時々顔を見せます。それ以上の干渉は無いです。

禁書世界の主人公はLv1程度の所謂落ちこぼれ、上条たちとつるんでいました。

と言っても高校入学から一学期の間だけです。まだまだ、付き合いは浅い方でした。

このまま何もなければモブキャラとして消えていく程度の存在だったということです。

（青紙ピアス以下と言うと分かりやすいかもしれませんが。まだ青紙ピアスがキーパーソンでないと断言できないですが……）

7／19多少修正。思い出の記憶↓エピソード記憶。

**風が生まれる。(前書き)**

だいぶ無計画なスタートでしたが……。  
大丈夫でしょうか？



## 風が生まれる。

七月二十一日、夏休みだ。

正確には昨日から休みに入ったので夏休みの二日目——のはずだったが、あいにく昨日は病院で検査を受けていたので実質今日が夏休みの初日と言ってもいい。

俺——美空夏月は所謂落ちこぼれにカテゴリーされている。

脳を開発して超能力を開花させるこの学園都市においてのランク付けはレベル1。一応は能力者といったところだ。

レベル1じゃ自慢にもならないのだが……。

せめて2、欲を言えばそれ以上欲しいところだが、こればかりはどうしようもない。

補習だけは避けたかったから期末テストに全てをかけた結果、なんとか合格ラインをクリアした。

今頃悪友たちは教室でヒーヒー言ってることだろう。

さて、折角の夏休みの始まりを病院で迎えた訳だがこれからが大切なのだと自分に言い聞かせる。

まずやることは……能力を使ってみることからだろう。

自分の半分は能力なんて大したことないと言ってやまない。

しかし、それでは気が済まないのも自分だ。夢にまで見た超能力と言ってもいい。

選んだ場所は人気の無い公園。

能力の概要は知識としてある。風を操る力『風撃使用』<sup>エアロマスター</sup>。

同じ風系能力で代表的な物に『風力使用』<sup>エアロシユーター</sup>や『空力使用』<sup>エアロハンド</sup>がある

が、それらの特徴を合わせ持つ能力だ。反面、極端に効果範囲が狭い上に俺のレベルは1。

全力で能力を使って小さな扇風機程度の風を起こすことにどれほどの意味があるのか……。

なんにしても使ってみればわかるか。

少し離れた場所に置いた空き缶目指して風を飛ばす。

スパーン。

軽快な音を上げながら空き缶が宙を舞う。

おかしい、こんなに威力はなかったはずなのに……。

疑問に感じつつ再度トライ。

次はさっきよりも高く飛んだ。もしかしたら能力が上がっているのか？

……試してみよう。

レベル1では作れなかった風で真空刃を作る。そして地面に転がった空き缶を狙って飛ばす。

カッンッ。

「……………ッ!!」

驚くほど呆気なく空き缶が両断された。間違いない能力が強くなっている。

ふと、能力のアイデアがどこからともなく現れた。

効果範囲は手のひら付近だけでいい、気流の渦巻く小さな球を作り出す。

バスッ。

「うおお!？」

球はしっかりと形を保てず弾けた。思ったより難しい。

これはなんだったか……。

確か……螺旋丸、だったか。

よく思い出せないが今後練習してみよう。

実際のところ補習を回避したところでもあります。何も無かった夏休みの予定が少し埋まった。

**風が生まれる。(後書き)**

効果範囲の話。

真空刃でも有効射程は四メートル。

遠距離技としては落第でしょう。

真空刃は空気を切り裂くのであまり抵抗を受けない。なので一番  
射程が長くなります。

螺旋丸に至っては手から離れたら維持できないですね。

## 自由への道具（前書き）

何か難しい話になった……。  
早く本題に入りたいなあ。

## 自由への道具

一通り能力の確認が出来たところで取り敢えず寮に帰ることにした。

時刻は昼時。そうなれば寮に戻る前に昼ご飯を済ませたほうがいいかもしれない。

食欲は意識したとたん強まったかのように思えた。こうなってしまつては食べないわけにはいかない。

空腹を我慢する努力も早々に諦めて、あやふやな記憶を頼りに近くのファーストフード店などがないか探すことにした。

「まさか……これは……ッ!？」

数分後、見つけたのは食べ物ですら無かったが、俺の目を奪うに足りるものだった。

空腹すら忘れかけた。

それを見た瞬間、脳に雷鳴が轟いたかのような驚きが訪れたのだ。値段は驚くほど高かったが迷う必要が無かった。

俺は衝動のままにそれをレジへ運んだのだった。

場所移り、さっきとは別の公園。

コンビニで買ったオニギリを頬張りつつ説明書に目を通す。

衝動買いたこれは超小型の強力なモーターを搭載した電動インラインスケートだ。スペック表によると原付バイクほどの馬力を持っている。

つまり、向こう側の世界で読んだ漫画『エア・ギア』<sup>エア・トレック</sup>で出てきた『A・T』そのままなのだ。

物によっては時速100以上で走ったり、何十メートルも飛んだ

り出来る、空を飛ぶ靴。

別名『エア・ギア』自由への道具

学園都市が科学技術の発達したところだとは知っていたがまさかこんな夢のようなものが実現するとは……。

しかも、『エア・ギア』では『ホイールが圧力を感知すると前進する』となっていたが、さすがは学園都市製。『脳が出す運動命令をホイールの操作にリンクさせ……』技術力はここまで進歩したのか……。

とまあ、なんにせよ夢を実現するために練習するのでしょうか。

結局、その赤いラインが入った黒い相棒を履いて、日が暮れてクタクタになるまで練習に励んだ。

遅い時間に帰宅した寮では火災報知器が作動したらしく水浸しになっていた。

寮の一部がドロドロに溶けていたがとても火事の後には見えなかった。

一体何があったのだろうか？

## 自由への道具（後書き）

本編はやっぱりまだスルーです。

二巻も……まだスルーですね。

基本学園都市の人間ですし、魔術関係の知り合いはいませんから。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9950u/>

---

とある世界の交差点

2011年7月22日03時10分発行